実践事例報告

Visible Thinking Workshop —思考を可視化するワークショップ

ハーバード教育大学院のプロジェクトゼロ(＊1)が提唱する学習プログラムを体験しよう！

Visible Thinkingとは、教室での学びを豊かにし、生徒の知性の発達(＊2)を促すための幅広く柔軟なプログラムで、その目的は思考を可視化することにあります。今回は、「See（何が見え）→Think（どう考え）→Wonder（どんな疑問をもったのか？何を想像したのか？）」というルーティンに沿って、ドキュメンタリービデオ「Namaste（ナマステ）」(＊3)を視聴するワークショップを行いました。参加者からは、授業で映像を見たり、スタディーツアーなどで体験を意識化したりする時に、大変有効な学習プログラムだとの意見が出ました。

はじめに

教室で、教師は、生徒に対してどのような教育実践を行っているのでしょうか？

知識投入型授業の場合、よく言われることは、教師は生徒に問いを投げかけますが、その答えはいつも教師の側がすでに持っていて、その確認としての問いかけでしかない点であり、しばしば生徒は既知の知識しか問われておらず、それはナンセンスではないか、という批判にさらされています。一方、開発教育やESD、地球市民教育では、問いに対する答えは、（すでに用意されている知識ではなく）問題解決としての気づきや提案であり、それこそが学習者の側に主体的に生まれることが重要だと考えられます。

そして、生徒の考えが時として浅はかに見えるのは、深く考える能力がないからではなく、深く考える機会がなかったり、考えようとしなかったりすることによります。良い思考には、能力、態度、気づきが必要です。Visible Thinkingは、この3つを育てるように設計されており、「See→Think→Wonder」は、まさに、その批判を乗り越え、学習者自身が学習テーマを深く理解するために有効なルーティンと言えるでしょう。(＊4)

(＊1)プロジェクトゼロは、1967年にハーバード教育大学院のネルソン・グッドマン教授により、芸術教育を研究、改善する目的で設立されました。2代目のディレクターがマルチプル・インテリジェンスで著名なハワード・ガードナー氏です。日本では熊平美香氏（クマヒラセキリティ財団）などが紹介しています。
参考：http://www.pz.harvard.edu/Research/Research.htm
http://www.japanmi.com/mifile/essay/Future%20of%20Learning.pdf

(＊2)「知性の発達（Intellectual development）」という訳語がこなれていません。Developmentのよい訳語があればご教示下さい。また、プロジェクトゼロの勉強会をしたい方は、東　宏乃までご連絡下さい。
東：azuma111@mrg.biglobe.ne.jp

展開（実践の内容）

(＊3) ドキュメンタリー「Namaste：Oneteen's look at Nepal」（7分）は、南カリフォルニアに住む中産階級の高校生サラが作成したドキュメンタリーフィルムで、この作品は、2008年に、ゴールドマン・サックス基金とアジア財団が主催するコンテストで優秀賞を受賞しました。途上国のネパールと先進国のカリフォルニアの生活の比較から、本当の豊かさとは何か？を考えさせられる映像で、グローバル社会を考える時に私たちが忘れてはならない視点を捉えており、グローバル教育の授業で活用されています。
参考：http://www.youtube.com/watch?v=NIsA_ACfsFM

1. 今回のワークショップのゴール（Outcome）、進行次第（Agenda）、約束（Rule）、ファシリテーター及び参加者の役割（Role）、OARR（オール）の説明(＊5)。

「約束」では、特に、「（映像を見た感想を書き出しますが）知識ではなく、どう感じたかを大切にしながら、気づきや発見に敏感になりましょう」と促す。そして、最後の「ふりかえりで大切にしたい点」は、「See→Think→Wonder」体験を通じて、第三世界についての各自の思い込みや大切にしている価値観に気づいたり、それらに変化があったりするかもしれないワークショップです」と、言い添える。

一緒に対話をするペア（2人1組）を決める(＊6)。（10分）

2. Visible Thinkingの概要説明。題材とする映像の紹介。（5分）
3. ドキュメンタリービデオ「namaste」(＊7)の視聴の仕方の説明と実際の視聴（2分＋7分）。
4. 「See」：映像に「何が見えたのか」を、1人ずつポストイット(＊8)に1項目につき1枚ずつ、書けるだけ書き出し（3分）、A3の紙に2人分を一緒に貼りだし、書き出されたポストイットを見合い、シェアおよび意見交換をする（5分）。時間があれば、他のペアが書き出した項目を見に、隣の机などを覗きに行ってもよい。
5. 「Think」：映像を見て「何を考えたのか」を、1人ずつポストイットに書けるだけ書き出し（4分）、新しいA3の紙に2人分を一緒に貼り出していく（6分）。4．と同様に2人でシェアと意見交換（6分）をする。他のペアの結果を見に行ってもよい。
6. 「Wonder」：映像を見たり、4．5．と同様にポストイットを書いたりして浮かんだ「どんな疑問をもったのか？　何を想像したのか？」を、新たにポストイットに書けるだけ書き出し（5分）、2人分を新しいA3の紙に貼りだしていく（7分）。4．5．と同様に、貼りだしたポストイットをもとに、2人で意見交換をする（7分）。他のペアの結果を見に行ってもよい。
7. 「沈黙の7分」（休息&内省の時間）：「ネパールについて」もしくは「私たち先進国の生活について」あるいは「本当の豊かさについて」、ワークシート「今まで私は、○○○を△△△と思っていたが、今私は、○○○を□□□□だなぁ？と思っていることに気がついた。」の空欄を埋める。
このワークシートは、お土産として参加者が各自持ち帰る。

(＊4) Visible Thinkingの主要ゴール
一内容を深く理解します。一学習を動機付けします。一学習者の思考と学ぶ能力を高めます。一学習者の思考／学習態度を開発し、思考／学習機会の気づきを促します。一熱心に考え学ぶ生徒のコミュニティとなるような教室文化を築きます（by熊平美香氏）。

(＊5) 中野民夫・森雅浩他著『ファシリテーション　実践から学ぶスキルとこころ』（岩波書店）p.128

(＊6) ワークショップの時間が2時間半ぐらい取れる場合は、対話をするグループサイズを3人～4人と大きくしても良い。但し、5人で共有・意見交換をするのは難しい。

■実施日
2012年8月4日（土）
開発教育全国研究集会
「自主ラウンドテーブル」（90分）

■対象者
教育関係者、第三世界のもつある種の「豊かさ」に興味のある方、生徒・学生等。

■ねらい
開発教育やESD関連の問題について、参加者に当事者になってほしい場合の導入に使えるワーク。
第三世界と先進国の関係について、知識で構造的に理解しがちな時に、価値観や世界観といったレベルで気づいてほしい場合にも有効であろう。

■企画＆実践者
東　宏乃（共育ファシリテーター、大学講師）
http://be-winds.jp/
PCメール：azuma111@mrg.biglobe.ne.jp、
携帯：080-2194-3197

菊地敦子（ワークショップ企画コーディネーター）
http://www.re-co.ws/
PCメール：info@re-co.ws、
携帯：090-3245-5243

（＊7）題材とする素材は、今回のような映像に限らず、写真や1つの文章でも良い。

（＊8）ポストイットは7.5cm×2.5cm。これに見やすいようにサインペンで書く。

（＊9）サラのビデオに描かれていたアメリカでの精神安定剤の摂取量の多さを踏まえての疑問だと思われる。

8.「全体でふりかえり」（フィードバックタイム＆教育現場との橋渡しの時間）：「See→Think→Wonder」という学習のルーティンを体験して感じたことや発見したこと、各自の教育実践にどう応用できるか、などの意見交換。（15分～20分）

最初に、最近の学生は「正解」をすぐに求めてくる傾向が強く、それを防止するには良いワークだとの意見が出て、共感する参加者（教員）が多かった。最後には、福島県の教員の方とペアを組んだ男性が、被災した福島の現状をどう感じているかなど、大きな課題について教室で考える時にもこの学習プログラムが使えると思う、といったようなことを発言してくださった。

9.（補足）：埼玉県私立SH中学校での実践例を紙に掲示する形で紹介した。

「Wonder」で出てきた疑問・気づきなど

実践者の東さん（右端）

最後の「Wonder」で、ポストイットに書かれた疑問や気づきは、次のようであった。
これが、学びの入口になったり、さらなるレポートのテーマになったりと、応用できる。

(1) サラは、もう一度ネパールに行くか、他の途上国へも行くに違いない。どう感じるか？
(2) 笑顔≠物の豊かさ　　豊かさってどうやって測るのか？
(3) 豊かさの定義は違ってよい。豊かさの定義を相手に押し付ける必要はない。
(4) GDP（国内総生産）が低くても幸せ。
(5) 幸せって何？どんな状態を言うの？
(6)「豊かになりたい」国の人たちと通じ合うには？
(7) 何の為に、誰のために精神安定剤ってあるの？（＊9）
(8) ネパールの人は外の世界を見てみたいのか？
(9) 好奇心の功罪。情報がある事って良い／悪い？
(10) サラの問題提起を受けて、（私達は）どうすべきだろう？

参加者の感想

・ビデオ教材を見せる時や、その他見て考える際の型の一つとして有効な方法だと感じた。
・「See→Think→Wonder」の段階を追うことで、具体的に考えられるようになる。「Wonder」の内容でレポートを書かせても面白い！
・ワーク自体はファシリテーションも含め勉強になった。内容については一面的になる危険性などの補足や状況設定（例えばこれまでに○○を学んだとして・・・）が必要。
・思考の訓練が日本人には必要だと思った。

実践者の感想

実践者の菊地さん

・「See→Think→Wonder」という学習のルーティンは、日頃何げに素通りしてしまっている思考のプロセスを意識化し外在化する、つまり「可視化」するのに役立つ学習の枠組みだと考えます。特に、人権・環境・持続可能な開発・社会変革など、問題をとりまく事実と、個人の意見・感想とを混同しがちなテーマの時に、順を追って意識し、場に集う参加者相互が理解しあうためには有効な手段だと思われます。
・「Wonder」で気づいたことを出発点にし、当事者として学びの入口に立ち、さらなる問題発見や課題の探求をしてほしいと思います。
・参加者が予定人数を大幅にオーバーし、オブザーバー参加の立ち見も出て、このような教育実践が望まれていることを痛感しました。今回のワークが、教室で学習者主体の実践を一層繰り広げるための参考になったのなら嬉しいです。

（報告：東　宏乃）